

「森と水と命の惑星」国際会議

～地域と世界の心と魂を詠む～



塾長 梅内 拓生

芭蕉の俳句とセザンヌの絵はつながるか？(3)

(風と風流)

芭蕉は「奥の細道」で次の句を詠んでいる。

風流の初めや奥の田植歌

須賀川で詠んでいる。

酒田ではあつみ山や吹く浦かけ夕涼み

暑き日を海に入れたり最上川

古今東西、詩人は風を感じ、風を詠んでいる。イギリスの女流詩人クリスチナ・ロセッティは風を次の詩に詠んでいる。

だが風を見たでしょう

ばくもあなたもみやしない

けれど木の葉をふるわせながら
風はとおりに過ぎてゆく

人は風に命のいろいろな姿を感じている。芭蕉も風にながれて聞こえて来る田植え歌を詠み、山から海に吹いて来る涼しい夕涼みの風を詠み、海にそそぐ最上川の夏風を感じながら詠んでいる。

風は流れる。この動きを「命」は敏感に感じ取る。セザンヌの絵もこの動きを感じ取って描いていると思うと「芭蕉の句とセザンヌの絵はつながるか?」、それはつながって来ると思うようになった。

(希望の風)

中村 光

三陸へ行く橋のたもと

にどっしりと風を受け止める大げやき立つ雲ひとつない青空に災害のない平和をばねじりおし

返歌

大げやき橋ゆく人を日々眺め風に送れる希望と悲しみ

田端五百子
復興の願いを込めて学生らの造りし荒巻寒風にまよる

閉店の鍵下ろす頃に終電車の汽笛ききしよ全てまぼろし

返歌

終電車汽笛に寒風思ひ出や学生造る鮭の荒巻風が吹いて来る、その中に時として希望を、時として挫折を感じる。希望と挫折はつながっている。大震災と復興への思い、風には希望と挫折が入りまじっている。

(根っかせる)

橋のたもとにある大げやきほどどっしりと根を深く張って、風雨を受け止めている。

2月20日(水)の「世

迷言」はものつへりの

魂を大地に根付かせて環境、経済、安全、便利など多様に変わりゆくライフスタイルの根っこにあるものを育ててきたトヨタを始めとする日本の自動車産業が世界の大きな関心を呼んでいると述べている。

第8面の「遠きにありて ふるさを思うメセージ 自然との共生が命を守る (森と堤防)づくりを推進」の考えと行動には深くうなずかさせられる。

第5面の「随想 自然を見つめて思う事大船渡市三陸町 千葉元子」、これも東日本大震災と復興への思いを、現実の生活の根のどこから考えを述べている。

昭和初期の三陸大津波の話しを聞いて育ち、チリ津波を経験して、今回の東日本大震災を受けた故郷に足を運んだことを思い、この「随想」に響くものを感じている。気仙の風土に根付いている自然と社会の価値観を世界と共有することを目指しましょう。